



TITLE:

# <矢野仁一博士追悼録>矢野名譽教授の訃

AUTHOR(S):

宮崎, 市定; 内藤, 雋輔

---

CITATION:

宮崎, 市定 ...[et al]. <矢野仁一博士追悼録>矢野名譽教授の訃. 東洋史研究 1970, 28(4): 5-9

ISSUE DATE:

1970-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152803>

RIGHT:

矢野仁一博士追悼錄

## 矢野名譽教授の訃

倉敷市にお住いの矢野仁一博士は、昨夏「理由のわからぬ中共の文化革命——私の六つの疑問」なる論文を雑誌「共産圏問題」に發表されるなどお元氣であつたが、暮頃から疲勞を感じられ、昭和四十五年正月二日午後九時逝去された。享年九十七歳七月。正月四日午後二時より、倉敷市日吉町三六二番地、次男喪主正幸氏方で告別式が行われた。岡山在住の教室出身、内藤雋輔、藤澤吟治等の外、京都からは農學部名譽教授近藤金助博士、桑原武夫、塚本善隆、貝塚茂樹、森鹿三、佐伯富、宮崎市定等が參列した。宮崎市定が受業生を代表し、内藤雋輔が岡山史學會と以文會岡山支部を代表して悼詞を捧げた。

悼

詞

受業生代表 宮 崎 市 定

先生の突然の御訃音は私等の耳を驚かせました。先生は非常な御高齢にも拘わらず、私共がお目にかかる時は、いつも壯者を凌ぐお元氣で、長時間に亘ってお話し下さったので、この分ならば必ずや百歳をお迎えになるに相違ないと安心していたのです。然るにゴールを直前にして御他界遊ばされましたことは私共の思いがけなかったところで、誠に哀悼にたえない次第であります。併しながら、お年九十七歳七箇月、昔流に數えて九十九歳という御壽命は稀にみる長壽と申さねばなりません。東洋史の先生方は概して御長命と稱せられました中にあつても、特に御長命であり、世界の學者の中にもあまりその比を見ないのでないかと存ぜられます。この御壽命は先生が原來御達者にお生れつきなられたせいである

と共に、又御家族の皆さまが心を合せておいたわりになり、御孝養を盡された結果と存じ、深く敬意を表する次第であります。

顧みますと私共が大學で先生の薫陶に浴しましたのは既に四十年ほども昔のことになりました。併し先生の私共に對する教育は大學の教室における講義で終ったものではありませんでした。先生が親ら身を以てする學問に對する精進が何ものにも増して私共を激勵する實物の教育であり、それは停年で御退官の後、ずっと引續いて現在に至ったのであります。先生の御著書は主なものだけで二十冊を越え、その多くは既に古典的な名著として名聲を博し、しかもこれに比肩しうる新研究が未だに現われない状態であります。先生の御研究の質と量と共に、これに投ぜられた時間の長さは何人も及ばなかつた所であります。この倦むことを知らぬ持續性は、先生の學問に對する態度から自然に生じたものと拜察されます。先生は心から楽しんで研究に従事され、塵世の名利を度外視され、ひたすら御自身の好む所に従つて、勉學一途に精進されました。これこそ私共にとって千鈞の重みのある無言の教訓でありました。殊に先生が九十五歳の御高齢で「中國人民革命史論」の大著を發表せられ、續いて組上り三〇頁に及ぶ大論文を雜誌に御執筆になったことは、一層私共を驚歎させずには置きませんでした。一世代、或いはそれよりも若い私共は、うかうかしては居れないことを痛切に訓えられたのであります。現在こうして御遺影の前に立ちますと、先生はいまにもお口を開いて、いつものように熱意をこめられた御口調で、君！文化大革命は！毛澤東の考えはだ、とお話しかけになるような氣がいたします。

先生の御一生は誠に長い、幸福な御一生であつたと存じます。何物にも拘束されず、どの方角にも氣兼ねせず、仰言しやりたいことを仰言しやり、そして精神をうちこむ好きな仕事をお持ちになりました。何一つ御不自由なく、御家族の暖い雰圍氣につつまれ、立派な仕事を後世に残し、白歳の壽を保って、安らかな大往生を遂げられたのであって、これも御人徳の致すところと存じ上げる次第であります。

お別れのことば

岡山史學會・以文會岡山支部代表 内 藤 雋 輔

矢野先生は遂に逝去されました。巨木の倒れるように一月二日夜九時、數え年、九十九歳の長壽を終られました。ご家族のお手篤い看護の中に、靜かに靜かに長い眠りに入られたそうであります。

昨夏以來、どうも少しお加減が悪いのではないだろうか、時々お伺いした私には感じられましたが、然し、その都度、先生のいつに變らぬお元氣な口調で、滔々と中國の人民革命についての最近のご研究の一端なり、ご感想を述べられるのを、ちっと聞いていますと、そのお元氣な迫力、生命力のすばらしさには、若い者も遠く及ばぬ感じがあり、この調子では文字通り、先生百歳の壽は間違いないだろうという感じをうけて、辭去するのが常でありました。

それ程、先生は老來、益々、研究にご熱心で、孫文の中國革命から毛澤東の文化大革命に及ぶ中國の最近事に對する、歴史家としての先生の、洞徹した史眼による批判は止まるところがなく、常に痛烈であり、然も、そこには中國民族と文化に對する深い理解と暖かい同情とが藏せられており、進展して止まぬ歴史の命運と革命の必然性とを、中國の歴史の中に探り、そこに新しい民族の命運が常に切り開かれてきたことを、痛感されていたようであります。

従つて先生は早くから毛澤東の人民革命にも、その必然性を認めつつ、新中國が驚異的發展を遂げ、政治革命から社會革命、人間革命にまで及んでいる毛澤東の偉大なる業績に、感嘆と賞讃とを惜しまれなかつたのは、敗戦後における日本の政治の進路と、國籍不明の感のある日本人の精神的混沌、社會秩序の混亂とに、深い思いをいたされたからであつたことは、私にはよくわかりました。

顧みるに先生の學問に對する熱情と、研究態度の嚴肅さとは、先生の中國近代史に關する主要な論著が二十餘冊という厖大な數に達し、その研究は世界的であり、先生が京都大學を退官されてから、その講座を繼ぎ、先生のご研究を發展さ

せている人が、中々、えられないということも、先生の中國近代史の研究が如何にスケールの大きいものであり、困難なものであるかということを示しております。

先生は、かつての京大教授として、また、日本の進路を示す王道政治思想家としての、輝かしい京都時代が終つてから、ここ倉敷に隠棲されることになったのは二十年前にもなりますが、爾來、先生の倦むことなき研究は絶ゆることなく、今日まで續いていたのであり、先生の歴史的展開に基づく獨特の中國革命史論は大戦前はもとより、現代においても、隣接中國の命運と發展とに關心のある知識人、研究家、評論家の間においては、常に尊敬と關心とが注がれていたことは、先生が數年前に刊行された「中國人民革命史論」という大著において、わが國の中國研究家たちの間から、驚嘆と讚辭とが惜しまれなかったことによつても知ることができます。更に先生は最近、社團法人、歐ア協會の懇請によつて月刊「共產黨問題」の昨年八月號の卷頭論文に「理由わけのわからぬ中共の文化大革命」と題し、三〇頁にわたる大論文を執筆されました、從來、毛澤東の人民革命の成果を支持されてきた先生が、今次の文化大革命によつて劉少奇一派が追放されたのは、權力鬭争の表現としての毛澤東の世紀の大陰謀であると斷じていられますが、この論文は悲しくも先生の絶筆となりました。

然しこれを讀むと、齡、百歳に近い老先生が、あくまでも正義を堅持し、權力を排斥し、眞實を追求してやまない激しい熱情をほとばしらせていられることが、ひしひしと感ぜられ、一讀して先生の氣魄に強うたれるものがあるとともに、先生が、生命いのちつづく限り、學問を、然も學者として最も困難な現代史の研究を、資料不足のこの地方都市において、瞬時も中絶されず、孜孜として倦まなかった、その絶倫の研究心と、また學問に對し、社會正義に對する深い情熱とは、さらに衰えることなく、とかく怠り勝ちな私に對する愛の鞭となつたと追想されまして、今更にこの大先生を失つた悲しみにうたれます。

私は學問の専攻分野においては、不幸にして先生と異なっていました、大學卒業以來は、却つて先生に接する機会に

恵まれ、そのお仕事を、お手傳いする度びごとに、先生の國家に對し、民族に對する熱情と、社會正義と教育者の使命に對する先生の倦むことなき信念とに、深い深い感銘をうけ、私自身の精神的據りどころとして、時に慈父の如く、時に嚴師のごとく、常に私を啓發し指導して下さったことは、私が今日まで、常に研究者、教育者の一員たるの資格に深い反省をいだきつつ、進みえた最大の要因であり、先生のご一生は眞に私にとって不滅の燈火でありました。

今やこの精神的支柱であり、光明でもあった先生と、ここに永遠のお別れをせねばならなくなったことは、人の世の定めとはいえ、私にとって堪えがたい悲しみであります。私は今後とも、生命ある限り、この先生の偉大なる數々のご教訓を身に體しつつ、つい一週間ほど前に、先生の枕頭に、久しきご無沙汰のお詫びを申し、いつにかわらぬ先生の慈顔愛語に接し、先生のお頭をなでつつ、先生のご長壽を祈ってお別れした感慨が、いつまでも私の今後の指針として、また悲しい追憶として、私を導いて下さることだと信じ、ここに涙とともに、この拙ない一文を先生のご靈前に捧げる次第でございます（一月三日朝七時、記し訖る）